

コロナ禍を上からではなく俯瞰する

藤沼康樹

医療福祉生協連 家庭医療学開発センター



今回、共同編集をお願いした青木眞先生と親しくなったのは、わりあい最近のことです。実は、青木先生が日本の臨床感染症学に多大なインパクトを与えてき

た医師であることを、それまではあまり認識していませんでした。しかし、だからこそ、バイアスのかからない出会いになったような気がします。

青木先生とは、日本におけるこれからの「総合診療」をどのように発展させるべきか、というディスカッションをすることが多いのですが、初めから印象的だったことは、「それはつまりどういうことですか?」「もう少しそこをくわしく教えてください!」「それはおもしろいですね!」「そういう患者さんをどんなふうに診察するんですか?」といった好奇心旺盛な質問でした。curiosity (好奇心) をとても尊ぶ態度が印象的だったのです。

年を重ね、経験も蓄積され、社会的評価も高くなると、人はしばしば「教えてあげようか」「そんなことは知ってるよ」といった上から目線の態度をとりがちですが、私はそういう人と接すると「ああ、すでに引退してるんだな…」と感じます。しかし、興味関心が尽きず、自分は社会にどんな貢献ができるだろうか、と考え続けている人には「現役」感があります。この「現役」感は年齢とは関係がない、と経験上思います。

本特集の臨床医学以外の著者は私が今一番話を聞いてみたいと思った方たちをピックアップすることができました。刺激的で思考を喚起する特集になっていると思います。

青木 眞

感染症コンサルタント



本特集は、基本的に藤沼先生のご企画・お仕事であり、私は少しお手伝い申し上げたにすぎません。今般のコロナ禍でも、診療の第一線には直接関与しておらず、

最前線で働く友人・同僚・教え子たちの安全と健康を祈るだけの者です。

ただ、傍観者としてより全体像を見やすい立場に置いていただいた結果、それがホスピタリストであっても家庭医であっても、コロナ禍にあって、いかに本格的な「総合診療マインド」(p.33)がわが国で必要であるかを見せていただいたと思います。総合診療マインドこそが、パンデミックであっても社会の高齢化であっても、変化し続ける医療環境に最も柔軟に対応できる“安全装置”なのです。私たちが多くの人々の健康や生命、そしてつながりを破壊するコロナ禍を通過する代償として、本特集が、わが国の医療をより「総合診療マインド」を備えた安全なもの、「パンデミック ready」な社会 (p.84) に変える機会となることを願っています。

G